

(財) 21世紀ヒューマンケア研究機構

21世紀ヒューマンケア研究機構 研究年報 第9巻 (2003年度) 抜刷

母親の育児ストレス

—子育て意識とコミュニティ意識に関する計量的研究—

河 野 由 美

母親の育児ストレス －子育て意識とコミュニティ意識に関する計量的研究－

河 野 由 美

キーワード：育児ストレス、子育て意識、地域

Key Words : rearing stress, attitude of child rearing, community

I. はじめに

近年、核家族化・少子化・都市化、そして地域の絆の希薄化が進展し、子育てを取り巻く現状には厳しいものがある。子育てに不安を有する親の増加、子育ての孤立化、虐待などの問題がクローズアップされ、子育てをめぐる様々な問題が指摘されている。

厚生省（現：厚生労働省）が、平成10年版『厚生白書』の中で「三歳児神話には、少なくとも合理的根拠は認められない」（p.84）と明記しているにもかかわらず、人々の意識の中から、「三歳児神話」や「母性神話」が完全に払拭されたとは言えない。子どもに関する問題が生じるごとに、責任は母親一人にあるかのような言説がまことしやかに唱えられ、家庭の教育力の低下などの家族機能の衰退が子育て問題の元凶であるかのように指摘されてきた。だから良い子を育てるためには、母親が家庭で子育てに専念しなければならないという結論が繰り返し導かれてきた。そうした背景には、子育て問題の原因は母親の育児能力の低下、母親の資質の低下であるという考え方があり、「良い母親でなくてはならない」と過度に母親にプレッシャーをかけてきた。しかし今日、子育てをめぐる問題は、母親だけの、特別な人や家庭で生じる問題ではないこと、そして子育て家庭の個別の問題というよりも、コミュニティの衰退など社会や地域のありようの問題であることが、認識さ

れてきている。そうした認識から、子どもは地域で育てるものであること、子育ては社会的な営みであり、社会全体が担うものであるとの意識が徐々に浸透してきている。

また、地域共同体の絆や地縁が希薄化し、地域社会の崩壊が叫ばれてから既に長い年月がたっている。そして、地域住民のエンパワーメント（Empowerment）を活かし、住み良い町づくりを行うにはどのようにしたら良いのかが、行政や自治体の関心の的であり、今日的課題となっている。

II. 目的

育児不安を生じさせる原因に関しては、これまで様々な議論がなされ、育児不安や育児ストレスは、有職の母親よりも専業主婦の母親の方が強いという先行研究結果が報告されている（柏木、2001、ベネッセ教育研究所、2000）。一方でそうした、育児不安に影響する要因として、牧野（1981、1987、1988）は、これまでの研究の蓄積から育児不安は、夫婦の関係のありようと、母親が自分自身の社会関係を持てるかが関係していることを明らかにしている。また、大日向（1999）は母親が、子育てに完璧さを求めること、子育てを自分一人の責任と感ずること、夫とのコミュニケーションがうまくとれないことが育児不安に関連していることを指摘している。

本研究では、母親の育児不安や子ども否定感に影響する要因の解明、そしてなぜ、専業主婦の方が有職の母親よりも育児不安が強くなるのか、その原因について計量的分析から実証的に解明することを目的とした。そして、地域での子育て意識とコミュニティ意識の関連についての、以下のモデルの検証を試みることを目的とした。ここで、以下のモデルを導き出した理由を少し説明しておきたい。

近年ボランティアやNPOの力が評価されつつあるが、子育て支援の場でも活発な動きがみられ、一時保育や地域子育てセンターなど保育所を中心とした地域の子育ての場づくりの動きに加え、地域で生まれた自発的な協力関係も育ちつつある（国民生活白書，2001）。そうした中、現在子育て中の親自身が子どもとともに活動する子育てサークルも活発な動きを見せている。「よみうり子育て応援団」調査によれば、58%の人が、子育てサークルやPTAなどの地域活動に参加していると報告されている（読売新聞，2003年1月28日付け）。また、文部科学省委嘱事業として「子育てサークル研究会」が行った「子育てサークルの活動に関する調査」によれば、サークルに加入した理由としては、子どものための理由だけでなく、親自身のための理由や、親の育児ストレスを発散する場にもなっていることが報告されている（国民生活白書，2001）。こうした、先行研究の結果を考慮すると、母親は育児に不安やストレスがあるからこそ、地域で子育てを支え合いたいと思い、そうした地域での子育ての支え合いは、コミュニティへの関心につながるのではないかと予測を持ち、以下のモデルを設定した。

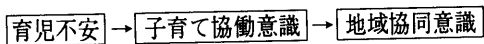


図1 子育て意識とコミュニティ意識の関係モデル

1. 育児ストレス

既述したように、育児不安に関する研究はこれまで数多くなされてきたが、それらは「育児不安」や「子育てストレス」など様々な用語が

用いられており、心理学的な概念として必ずしも一致した見解が得られるまでには至っていない（菅原，2001）。牧野（1988）は育児不安に関する概念を再検討する中で、「これまでの＜育児不安＞の概念についての検討結果を考慮するならば、「子どもが好きではない」とか「子どもが足手まといに感じられる」などの否定的感情を加える方が、より適切であるように思われる」（26頁）としている。本研究では育児不安に関する先行研究の知見を参考にし、育児不安や子どもに対する否定的感情を育児ストレスと操作的に定義し、これを測定するための尺度の作成を試みた。

2. コミュニティ意識

コミュニティ概念に先鞭をつけたのはマッキーヴァー（MacIver, R. M., 1917）とされ、マッキーヴァーは、コミュニティをコミュニティたらしめている基礎は、「地域性」（locality）と「コミュニティ感情」（community sentiment）であり、コミュニティ感情とは①「われわれ意識」、②「役割意識」、③「依存意識」としている（松原，1978）。コミュニティに関する研究も今日まで数多くなされている。中でも、田中・藤本・植村（1978）は地域社会への態度を計量的に測定するための尺度を開発している。本研究では田中ら（1978）の地域社会への態度尺度を参考にした、新たなコミュニティ意識尺度の作成を試みた。

Ⅲ. 調査方法

本稿では、兵庫県ヒューマンケア研究機構家庭問題研究所が2002年に行なった「地域における子育て支援についての調査研究」のデータを用いている。兵庫県在住の6歳以下の子どもを持つ母3,163名に質問紙調査を実施した。その調査概要は以下の通りである。

1. 母集団

兵庫県在住の6歳以下の子どもを持つ母を母集団とした。

2. サンプルの抽出

兵庫県内10圏域の、神戸市、阪神南、阪神北、東播磨、北播磨、中播磨、西播磨、但馬、丹波、淡路の各地域の中から、平成12年度の出生数が最も多い市町を、一つずつ選出した。なお、淡路地域では南淡町と西淡町の二つの町を選出した。抽出割合は郡部が都市部に比し出生数が少ないため、単純に人口比では算出せず、都市部と郡部の抽出比が3:2となるように調整した。

都市部、郡部ともに、保育所と幼稚園を一つずつ選出し、乳幼児健診では4ヶ月健診と、1歳6ヶ月健診か3歳児健診のどちらか一方の、二健診を対象とした。

3. 調査方法

幼稚園・保育所に、自記式調査用紙を配布し、一定期間留め置いた後に回収することを依頼した。乳幼児健診では、健診時に担当者に調査用紙配布を依頼し、郵送にて回収した。

幼稚園・保育所・乳幼児健診ともに、回収に際してプライバシーを保護するために、回答後の調査用紙はシールで厳封し、封筒に入れて回収した。

4. 調査期間

2002年8月上旬から10月上旬

5. 回収票数と回収率

有効回答票数は1,574票（有効回収率：49.8%）。乳幼児健診の回収率19.8%、幼稚園の回収率83.4%、保育所の回収率64.4%。

IV. 結果

1. 分析対象者の基本属性

母親の平均年齢33.1歳、SD=4.4。

平均子ども数は2.04人（SD=.78、Min=1、Max=5）。末子の平均月齢38.8（3歳3ヶ月）、SD=22.8。

専業主婦が910人（57.8%）、非専業主婦は664人（42.2%）。

2. 育児ストレス

育児に関する不安感や子どもに対する感情をたずねた項目に因子分析（主因子法）を実施した（表1参照）。因子数の決定に際しては最初、固有値が1以上という基準を採用したが、分散が低いため、次に固有値が大きく低減する一歩前という基準を用いて因子数を決定した。その結果、予測通りに「子ども否定感」「育児不安感」の2因子が抽出された。尺度の内的整合性を示すCronbachの α 係数は、第2因子が.62とやや低めではあるが、項目数が2項目と少ないことを考慮すると、比較的満足のゆく信頼性係数が得られた。因子間相関が高いためプロマックス回転を行なったが、「子ども否定感」と「育児不安感」には $r=.67$ と非常に強い相関が認められた。育児不安と子ども否定感には強い関連があり、育児不安が強まると、虐待につながる恐れのある「子ども否定感」が強まることが、この結果より推察される。

表1 育児ストレス因子分析表（主因子法プロマックス回転）N=1,529

| | I | II | 共通性 |
|------------------------------|-------|-------|-----|
| <子ども否定感> $\alpha=.753$ | | | |
| 子どもと一緒にいると楽しい気分になれないと感じる | .769 | -.067 | .37 |
| 時々、子どもの顔を見たくなくなる | .586 | -.112 | .38 |
| 自分は子育てに疲れきっていると感じる | .571 | .163 | .42 |
| 子どものことがわずらわしくてイライラする | .498 | .271 | .27 |
| 時々、子どもを虐待してしまう | .456 | .145 | .20 |
| <育児不安感> $\alpha=.617$ | | | |
| 自分の子育てが、これでよいのか不安になる | -.137 | .904 | .32 |
| 子どもが泣いたときなど、どうしたらよいのかパニックになる | .232 | .413 | .30 |
| 固有値 | 3.24 | .90 | |
| 分散の % | 46.3 | 12.9 | |
| 累積 % | 46.3 | 59.2 | |
| 因子相関行列 | I | II | |
| | I | .668 | |

表2 地域での子育て意識因子分析表（主因子法、バリマックス回転）N=1,528

| | I | II | 共通性 |
|------------------------------|-------|-------|-----|
| <子育て協働意識> $\alpha = .767$ | | | |
| 子育てに必要なならば、地域の活動に積極的に参加してもよい | .714 | -.196 | .42 |
| 地域で子育てを支え合いたい | .695 | -.058 | .37 |
| 子育てに関する共通の話題を持てる仲間が欲しい | .656 | -.059 | .34 |
| 子育てに関する情報が欲しい | .567 | -.095 | .29 |
| 子育ての大変さを、地域の人に理解して欲しい | .508 | -.027 | .24 |
| <子育て私的意識> $\alpha = .558$ | | | |
| 子育てに関して他人が口を出すべきではない | -.069 | .619 | .16 |
| 子育ては、その子の母親に任せておくのがよい | -.084 | .616 | .17 |
| 初期の固有値 | 2.69 | 1.32 | |
| 分散の % | 38.48 | 18.86 | |
| 累積 % | 38.48 | 57.34 | |

3. 地域での子育て意識

子育てに関しては、地域や社会で共に支え合いたいと考える人もいれば、子育てに関して他人が口を出したりすることを嫌がる人もいると思われる。地域での子育て意識に関する情報を集約し、地域での子育てに関して、どのような意識タイプがあるのかを明らかにするために、子育て意識に関連する項目に、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を実施した。因子数の決定に関しては、固有値が1以上で大きく低減する一歩前という基準を用いた。その結果、「子育て協働意識」「子育て私的意識」の2因子が抽出された（表2）。そして、 α 係数は、第2因子が.56と低めではあるが、項目数が2項目と少ないことを考慮すると、比較的満足のゆく信頼性係数が得られた。

4. コミュニティ意識

コミュニティ意識に関連する項目に因子分析（主因子法、バリマックス回転）を実施した。因子数決定に際しては、育児ストレスと同様の基準を採用した。その結果、「地域協同意識」「地域愛着感」「プライバシー意識」「人任せ主義」の4因子が抽出された（表3）。

5. 尺度得点

育児ストレス、地域での子育て意識、コミュニティ意識の、各因子に高い負荷量を示した項目の評定値を加算し、項目数で除した値を各尺度得点とした。尺度得点は、4点に近い高い得点ほど、因子名の状態を示すことになる。各尺度は4件法で測定したため、尺度の中位点（どちらともいえない点）は2.5点となる。

近所付き合いの程度を独立変数とし、各尺度

表3 コミュニティ意識の因子分析表（主因子法、バリマックス回転）N=1,504

| | I | II | III | IV | 共通性 |
|-------------------------------------|------|------|------|------|-----|
| <地域協同意識> $\alpha = .688$ | | | | | |
| 自分達の生活環境をよくするために、地域での活動は当然だ | .67 | .22 | -.08 | -.20 | .41 |
| 困ったときはお互いさまなので、地域の人とは助け合うのが大切だ | .65 | .17 | -.11 | -.06 | .34 |
| 地域活動は、さまざまな世代や職業の人との交流が期待できる | .43 | .42 | -.07 | -.16 | .33 |
| 地域の皆と何かをすることで、自分の生活の豊かさを求めたい | .38 | .36 | -.16 | -.05 | .26 |
| 地域活動には、日中に時間のある人だけでなく、動いている人も参加すべきだ | .31 | .15 | .04 | -.17 | .13 |
| <地域愛着感> $\alpha = .623$ | | | | | |
| 地域をほめられると、自分がほめられた気になる | .21 | .70 | -.06 | -.11 | .35 |
| いま住んでいる地域に、誇りとか愛着のようなものを感じている | .17 | .61 | -.12 | -.05 | .29 |
| いざという時には、遠い親戚より近くの他人が頼りになる | .29 | .36 | -.11 | -.05 | .22 |
| <プライバシー意識> $\alpha = .564$ | | | | | |
| 近所づきあいは、あまり深入りせず浅くつき合う方がよい | -.05 | -.09 | .78 | .09 | .24 |
| 近所づきあいはできるだけしたい | .36 | .23 | -.41 | -.02 | .29 |
| 近隣でもプライバシーに介入しないのが現代生活のルールだ | -.03 | -.07 | .41 | .22 | .17 |
| <人任せ主義> $\alpha = .681$ | | | | | |
| 学校の整備や遊び場の確保などは、行政など公的機関にまかせておけばよい | -.11 | -.08 | .11 | .70 | .29 |
| この町をよくするための活動は、地元の熱心な人たちに任せておけばよい | -.21 | -.10 | .22 | .65 | .34 |
| 初期の固有値 | 3.84 | 1.46 | 1.18 | .96 | |
| 分散の % | 29.6 | 11.2 | 9.1 | 7.4 | |
| 累積 % | 29.6 | 40.8 | 49.9 | 57.3 | |

得点を従属変数とした分散分析を実施した(図2)。その結果、子育て意識尺度得点とコミュニティ意識尺度得点に有意な違いが認められ、親しく近所づきあいをしている母親の方が、あいさつをする程度のつきあいをしている母親よりも、子育て協働意識が強く、子育て私的意識は弱い。また、地域協同意識や愛着感強いが、プライバシー意識や人任せ主義は弱いことが明らかになった。育児ストレスに関しては、近所づきあいの程度では違いが認められなかった(子ども否定感 $F[3/1508]=.70$, ns.、育児不安感 $F[3/1534]=1.61$, ns.)。

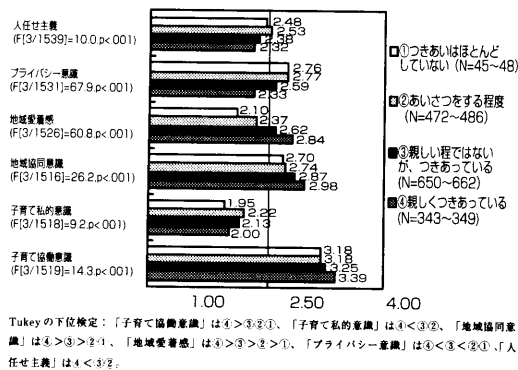


図2 近所づきあいと尺度得点平均値

同じく、子育てサークルに参加の有無で、上記の尺度得点が異なるかを検討した(図3)。その結果、子育てサークルに参加していない母親の方が、参加している母親よりも、子ども否定感が弱く、育児不安感も弱い傾向性にあることが明らかとなった。しかし、サークルに参加している母親であっても、子ども否定感尺度得点は中位点の2.5点を越えていないことから、総体的には母親は、子ども否定感を有していないことがわかる。こうした、サークルに参加していない母親の方が、否定感や不安感が少ないという結果の解釈としては、子育てサークルに参加することで、子ども否定感や育児不安が強まるというよりも、そうした否定感や不安感の高い母親が、支援を求めてサークルに参加していると推察される。

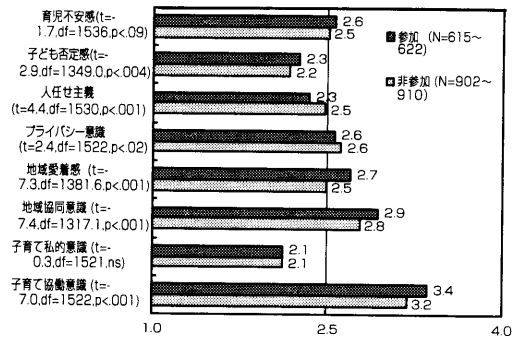


図3 子育てサークル参加の有無と尺度得点平均値

そして、子育てサークルへの参加の有無に関わらず、子育て協働意識や地域協同意識は中位点の2.5点を大きく上回り、子育て私的意識は中位点を下回っていることから、母親は地域で子育てを支え合いたいとする子育て協働意識を有しており、子育てに他人が口を出すべきではないとする子育て私的意識は有していないことがわかる。そして、地域協同意識も強く有していると言えよう。しかし、程度の問題として、サークルに参加している母親の方が、子育て協働意識、地域協同意識、地域愛着感が強く、プライバシー意識や人任せ主義が弱いことが明らかとなった。

上記の近所づきあいの程度の結果と総合すると、地域協同意識や地域愛着感が弱く、プライバシー意識や人任せ主義が強い人は、実際に近所づきあいが少なく、サークルにも参加していないことから、コミュニティ意識尺度には基準関連妥当性があると推察される。

なお、関西圏住民4,000名への無作為抽出調査の結果(河野他, 2003)では、本稿と類似したコミュニティ意識尺度を用いているが、本結果と類似した因子が抽出されている。そのデータの30歳代の女性(未婚者を含む)のコミュニティ意識尺度得点と本調査の30歳代の母親のデータを比較したのが表4である。検定を実施していないため、断定的なことは言及できないが、子育て中の本稿の母親の方が、同年代の女性に

比し、「地域協同意識」が高いことが伺える。子育て中の母親にとって、地域は頼みの綱であり、また子どもが健やかに育っていく環境を確保するためにも、多忙な時期でありながらも、コミュニティに関心を有していることが伺える。

表4 コミュニティ意識尺度得点の比較

| | 地域協同意識 | 地域愛着感 | プライバシー意識 | 人任せ主義 |
|----------------------------|--------|-------|----------|-------|
| 関西圏住民(女性)の30歳代(未婚者含む) N=84 | 2.75 | 2.66 | 2.98 | 2.43 |
| 本調査の30歳代の母親 N=1094 | 2.87 | 2.60 | 2.59 | 2.38 |

6. 育児ストレスに影響する要因

どのような母親が育児ストレスを有しているのかを解明するために、育児ストレスの因子得点をそれぞれ目的変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)を実施した(表5)。その結果、「専業主婦か否か」ということよりも、「趣味などの自分の時間を持つ余裕がない」「子育ては自分一人の責任だと感じる」「夫とのコミュニケーションがうまくとれていない」といった変数の方が、 β 係数が高く、育児不安感や子ども否定感に強い影響力を持つことが明らかとなった。

表5 育児ストレスを目的変数とした重回帰分析

| β (標準化係数) | 子ども否定感 | 育児不安感 |
|-----------------------|-----------|-----------|
| 趣味など自分の時間をもつ余裕がないと感じる | .233 *** | .211 *** |
| 子育ては自分一人の責任だと感じる | .191 *** | .229 *** |
| 夫と、うまくコミュニケーションがとれている | -.164 *** | -.186 *** |
| 母親の年齢 | .072 ** | |
| 子ども以外の同居人の数 | -.066 ** | |
| 夫は、育児は母親の仕事と思っている | .061 * | |
| 専業主婦か否か(専業主婦1、非専業主婦0) | | .057 * |
| 調整済み R^2 | .187 *** | .178 *** |

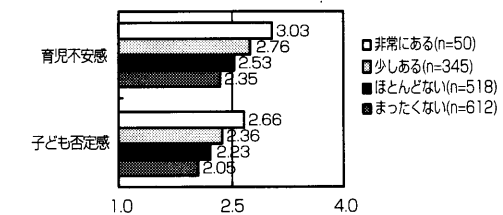
「子育ては完璧でなくてはならない」は、どの変数にも有意な回帰を示さなかった。「育児に関して夫婦で話し合う程度」には、多重共線性の問題が生じた。育児不安感 VIF=2.09、子ども否定感 VIF=2.17。

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

では、具体的に「子育ては自分一人の責任だと感じる」や「趣味など自分の時間をもつ余裕がないと感じる」「夫と、うまくコミュニケーションがとれていない」程度により、育児不安や子ども否定感がどのように異なるのかを明らかにするために、これらを独立変数とし、育児不安感と子ども否定感尺度得点を従属変数とし

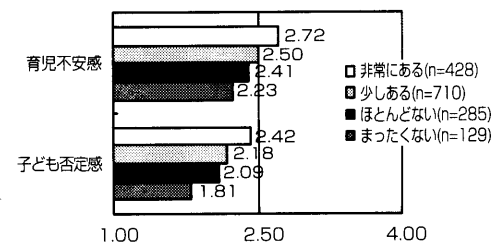
た分散分析を実施した。

まず「子育ては自分一人の責任だと感じる」程度では、主効果が認められ(育児不安感 $F[3/1521]=47.6$, $p < .001$ 、子ども否定感 $F[3/1521]=33.4$, $p < .001$)、子育てを自分一人の責任だと感じる事が非常にある母親は、育児不安感や子ども否定感尺度得点が中位点の2.5点を大きく上回っている(図4)。特に育児不安感においては $M=3.03$ と非常に強い不安を有していることがわかる。また、子ども否定感においても中位点との差の検定を実施した結果、有意な差が認められ、子育てを自分一人の責任だと感じる事が非常にある母親は子ども否定感を有していることが明らかとなった。



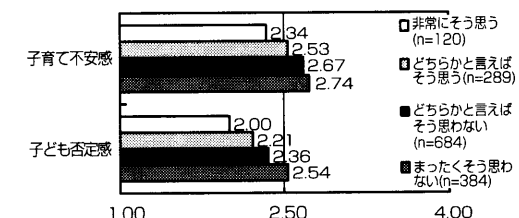
Tukey の下位検定: 育児不安感、子ども否定感ともに、非常にある>少しある>ほとんどない>まったくない。

図4 子育ては自分一人の責任と感じる程度



Tukey の下位検定: 育児不安感、子ども否定感ともに、非常にある>少しある>ほとんどない>まったくない。

図5 趣味など自分の時間を持つ余裕がないと感じる程度



Tukey の下位検定: 育児不安感、子ども否定感ともに、非常にある>少しある>ほとんどない>まったくない。

図6 夫とうまくコミュニケーションがとれている程度

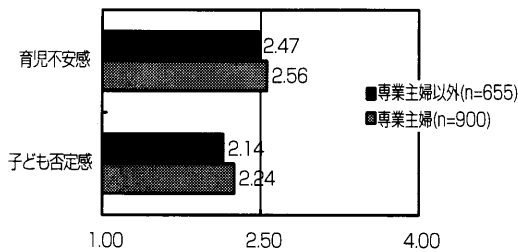


図7 専業主婦と非専業主婦の育児不安・子ども否定感

「趣味など自分の時間を持つ余裕がないと感じる」程度でも、主効果が認められ（育児不安感 $F[3/1548]=28.0$, $p<.001$. 子ども否定感 $F[3/1548]=43.9$, $p<.001$ ）、趣味など自分の時間を持つ余裕がないと感じることが非常にある母親は、育児不安感が中位点の2.5点を大きく上回っていることが明らかとなった（図5）。

「夫とうまくコミュニケーションがとれていると感じる」程度でも、主効果が認められた（育児不安感 $F[3/1473]=21.9$, $p<.001$. 子ども否定感 $F[3/1473]=36.4$, $p<.001$ ）。夫とうまくコミュニケーションがとれているとまったく思わない母親は、育児不安感が中位点の2.5点を大きく上回り、子ども否定感も中位点付近にある（図6）。

7. 専業主婦が非専業主婦よりも育児不安感の強い原因

専業主婦と非専業主婦の、育児不安感尺度得点と子ども否定感尺度得点の平均値の差の検定を実施し、結果を図7に示した。確かに専業主婦の方が非専業主婦よりも、育児不安感や子ども否定感強い（子ども否定感 $t=3.31$, $df=1553$, $p<.001$. 育児不安感 $t=2.76$, $df=1553$, $p<.006$ ）が、育児不安感では中位点付近にあり、子ども否定感も中位点を大きく下回っているため、日々の子育てにおいて現実的には大きな問題とはならないと思われる。

次になぜ、専業主婦は非専業主婦よりも育児不安が強いのかを検討するために、育児不安に高い回帰を示していた変数では、専業主婦と非

専業主婦ではどの程度違いが認められるかを分析した。その結果、「子育ては自分一人の責任だと感じている」（ $t=2.49$, $df=1548$, $p<.05$ ）のみに有意な差が認められ、「趣味など自分の時間をもつ余裕がないと感じる」（ $t=1.46$, $df=1552$, n.s.）、「夫と、うまくコミュニケーションがとれている」（ $t=-0.14$, $df=1478$, n.s.）程度には違いは認められなかった。従って、専業主婦の方が非専業主婦よりも育児不安が強いのは、専業主婦の方が、「子育ては自分一人の責任だと感じる」ことが関係していることが明らかとなった。

8. 「子育てを自分一人の責任だと感じる」程度に影響する要因

子育て支援に関する様々な議論の中で、「子育てを母親一人の責任にしないこと」の重要性が指摘されている。では、どのような母親が「子育ては自分一人の責任だと感じる」のかを明らかにするために、「子育ては自分一人の責任だと感じる」程度を目的変数とした、重回帰分析を実施し、結果を表6に示した。

重回帰分析の結果から、「子育ては自分一人の責任だと感じる」程度に最も強い影響力のある要因は、「子育ては完璧でなくてはならない」「夫は、育児は母親の仕事と思っている」ことであることが明らかとなった。

表6 子育ては自分一人の責任だと感じる程度を目的変数とした重回帰分析

| B (標準化係数) | |
|-----------------------|-----------|
| 夫は、育児は母親の仕事と思っている | .194 *** |
| 子育ては完璧でなくてはならない | .230 *** |
| 趣味など自分の時間をもつ余裕がないと感じる | .090 *** |
| 夫と、うまくコミュニケーションがとれている | -.105 *** |
| 専業主婦か否か（専業主婦1、非専業主婦0） | .074 ** |
| 調整済みR ² | .153 *** |

子ども以外の同居人の数、年齢、「育児に関して夫婦でよく話し合う」程度は有意な回帰をしめさなかった。

従って、母親の育児不安感や子ども否定感を強めないためには、「子育ては自分一人の責任」「夫とのコミュニケーションがうまくとれていない」「趣味などの自分の時間を持つ余裕がない

い」と母親が感じないようにすることが直接的には重要であり、間接的には、「子育ては完璧でなくてはならない」という意識を母親が強く持ちすぎないこと、夫が育児は母親の仕事としないことの重要性が示された。特に、専業主婦の母親の育児不安感や子ども否定感を強めないためには、「子育ては自分一人の責任」だと母親が感じないようにすることが、最も重要であると言える。

9. 育児ストレス・地域での子育て意識・コミュニティ意識の関係モデル

「育児ストレス」「地域での子育て意識」「コミュニティ意識」の関連を解明するために、共分散構造分析を実施した。その結果、モデルの当てはまりの良さを示す指標であるRMSEAは、.041と.05を下回り、CFIは0.961と1.0に近いことから、モデルが非常に有効であることが明らかとなった(図8)。

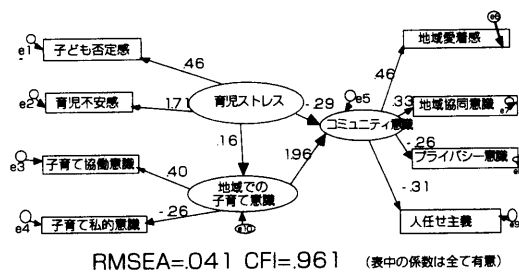


図8 育児ストレス・地域での子育て意識・コミュニティ意識の共分散構造分析

すなわち、育児不安など育児ストレスを感じている母親ほど、地域で子育てを支え合いたいとする「子育て協働意識」を強く有していること、「子育て協働意識」の強い母親ほど、コミュニティづくりの根幹となる「地域協同意識」や「地域愛着感」を強く有し、「プライバシー意識」や「人任せ主義」が弱いことが検証された。また、育児ストレスを有している母親ほど、コミュニティ意識は低いことが、地域での子育てを通じて、コミュニティ意識が高くなることがモデルから読みとれる。

V. 考察

先行研究から、育児不安は専業主婦の方が有職の母親よりも強いことが指摘されている。しかし、本研究の結果から、専業主婦か否かということよりも、「子育ては自分一人の責任であると感じる」ことの方が、育児不安感や虐待につながる恐れのある子ども否定感に強い影響力を持ち、専業主婦は非専業主婦よりも、育児不安が強いのは、子育ては自分一人の責任であると感じていることが関係していることが解明された。虐待につながる恐れのある子ども否定感を強めないためにも、子育てを母親一人の責任にしないこと、母親が子育てに完璧さを強く求めすぎないことの重要性が明らかとなった。

そして、母親は地域で子育てを支え合いたいという「子育て協働意識」が強く、子育てに他人が口を出すべきではないといった「子育て私的意識」は弱く、加えてコミュニティづくりの根幹となる、「地域協同意識」を有していることが明らかとなった。

子育てしやすい、より良いコミュニティづくりを行うには、行政の力だけでなく住民である親の力が不可欠であるのは言うまでもない。子育てサークルへの参加といった子育てを支えあう活動経験を有している母親ほど、地域協同意識は高い。子育てを地域で支えあう経験をする中で、より地域協同意識は高まり、エンパワメントを強めることにつながると思われる。母親への子育て支援は、長い目で見れば地域の絆を強め、地域協同意識を高めることにつながり、将来的には、少年非行防止・防災・介護などといった、さまざまな地域活動の活性化に結びつくのではないだろうか。子育て支援は親への支援になるだけでなく、地域の活性化につながる可能性があることが本研究の結果から示唆された。

【引用文献】

- [1]厚生省監修, 平成10年版『厚生白書』, ぎょうせい, 1998.
- [2]柏木恵子, 『子育て支援を考える』, 岩波ブックレットNo. 555, 2001.
- [3]ベネッセ教育研究所, 『第2回 幼児の生活アンケート報告書』, 2000.
- [4]牧野カツコ, 「育児における＜不安＞について」. 家庭教育研究所紀要, 2, 1981, 41-51.
- [5]牧野カツコ, 「乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安」. 家庭教育研究所紀要, 9, 1987, 1-13.
- [6]牧野カツコ, 「＜育児不安＞の概念とその影響要因についての再検討」. 家庭教育研究所紀要, 10, 1988, 23-31.
- [7]大日向雅美, 『子育てと出会うとき』, NHKブックス, 1999.
- [8]内閣府編, 平成13年度『国民生活白書』, ぎょうせい, 2001.
- [9]読売新聞, 2003年1月28日, 16面.
- [10]菅原ますみ, 「出産にかかわる意識」. (堀洋道監修)『心理測定尺度集Ⅲ』, サイエンス社. pp.94-115.
- [11]Maclver, R. M. Community: A Sociological study. London: Macmillan. 1917.
- [12]松原治郎, 『コミュニティの社会学』, 東京大学出版会, 1978.
- [13]田中國夫・藤本忠明・植村勝彦, 「地域社会への態度の類型化について―その尺度構成と背景要因―」, 心理学研究, 49, 1978, 36-43.
- [14]河野由美・金児暁嗣他, 「都市住民と村落住民の生活様式と価値観の特徴(2)―コミュニティ意識と宗教性―」, 日本社会心理学会第44回大会発表論文集, 2003, 724-725.

*本稿は平成14年度に兵庫県ヒューマンケア研究機構家庭問題研究所で実施した「地域における子育て支援についての調査研究」をもとに執筆されたものである。